

全ての兵道には義に死するという榮譽だけがあって、不義に生きるという辱めはあり得ない。しかしながら運命に十分に深く通じていなければ、時として過ちを犯すこともある。もしも過ちを犯して、物の道理においてこれをできる限り正さなければ、たとえ自己満足して死んだとしても、公私のために何の益するものがあるうか。運には五つのものがある。いわゆる天運、世運、人運、義運、作事の運がこれである。

優れた君主の下に忠良なる家臣があり、善政がなされて、すべてが法に基づいていても、水害や干害、火災、あるいは民が疾病に苦しみ、あるいはその君主が短命にして不幸であり、また世の衰運に遭う。これを天運という。悪どい主人が長生きし、一生歡樂を極めるようなこともまた天運である。自分に直接その原因があるわけでもないのに、あるいは世の中とともに繁昌し、あるいは世の中とともに衰退し、死生興亡もそのまま時の運と重なり、また天運に困るもの、これを世運という。その時勢の権（状況を急変させ、にわかには勝敗を決定づける決め手）によって、運の栄達があり、窮迫がある。これに対して、物事の機を察し天の心を確かめ、進退去就を自ら悟って自ら致す、これを人運という。まだ起こらないことにも則として従うところがあり、既に起きたことにも一定の規準がある。こうしたことを全て当然のこととして義のなさしむるところのものは義運である。謹慎、誠実、恭謙（慎み深く、へりくだった態度）、温良、力を尽くしてことにあたり、あるいはその反対に度を過ぎてきびしく、少しも思いやりが無く、大事なことをいいかげんにし、墮落し、でたらめであり、驕慢、などのわざに応じて、運に禍福、短長、長寿と夭折、満ち溢れたり欠乏したり、それぞれになることを作事の運という。物事にその兆しが最も顕著となるのが人運である。それゆえに、明智の士は人運だけを最も大切なものと考え、義運に順い、作事の運を慎んで、天運を決して疑わない、これを己の信条としている。運が大事である事をよく知るときは、すなわち道を守ることにおいても有益である。人運を明らかに示しながらも、世の運をとがめないこと。理（道理にかなうこと）と非（道理にかなわないこと）を心に決めて、死生存亡を義にまかせる。これを真の明智としなければならぬ。口伝。